

多文化共生のまちづくり2018

-美波町「生活者としての外国人」のための日本語教室空白地域解消推進事業-

徳島大学教養教育院・日本語システムコーディネーター

Gehrtz 三隅友子

はじめに

美波町が平成28年から実施した、文化庁「『生活者としての外国人』のための日本語教室空白地域解消推進事業」の「地域日本語教育スタートアッププログラム」が最終年度を迎えた。本稿は、この事業に日本語システムコーディネーターとして関わった筆者が、自治体が大学と連携のモデルを構築するという視点からこの3年間を振り返るとともに、今後の事業継続に関して考察するものである。

徳島新聞から

平成31年3月12日の徳島新聞朝刊に次の記事が掲載された。徳島県内の24市町村のうち11の市町が日本語教室を開設運営しているという内容である。外国人住民が全ての地域に居住していることを踏まえ、日本語教室が無い理由として、学習者からの要請がない、自治体に日本語を指導する人材がいない、事業所や国際交流協会に対応を任せている等が挙げられている。ここでは、地域に日本語教室が必要であることが暗黙の了解として書かれている。そして下段には、本稿の対象である美波町、さらにつるぎ町（平成29年度から本事業に取り組んでいる）が、日本語教室を始め好評を得ていることが伝えられた。両町が、文化庁のこの事業を活用して日本語教室を実現させた、すなわち国の施策を実施したのである。そもそもなぜ地域に住む外国にルーツを持つ人たちに日本語学習が必要なのかには、次の理由があるとされている。

それは、外国人が地域の教室で日本語を学ぶことで、地域の住民との日本語でのコミュニケーションが図れる⇒地域の問題を住民（日本人・外国人）として互いに解決に取り組める⇒地域が安心・安全な場所になる⇒そして新たな住民を受入れる循環ができることにより地域が活性化に向かう、という図式である。

日本の現状

大きな動きとして、平成31年4月からの改正出入国管理法（入管法）施行により、外国人労働者の受入れ拡大が現実のものとなった。新たに設けられた「特定技能」の在留資格による外国人労働者を迎え始めるのである。今後5年間に34万5千人を14業種（介護、ビルクリーニング、素形材産業、産業機械製造業、電気・電子情報関連産業、建設、造船・船用工業、自動車整備、航空、宿泊、農業、漁業、飲食料品製造業、外食業）で受入れる。これまで「専門的・技術的分野」の高度人材のみを対象にしていたのを、日本国内での深刻な人で不足を緩和するための策としての「特定技能」は、通算5年の滞在ができる「特定技能1号」「特定技能2号」（高度専門職と同様家族帯同も可能）に分けられ、「特定技能1号」は単純労働者とほぼ同じと考えられる。

（詳細は、法務省のホームページ「新たな外国人材の受入れ」を以下のURLを参照のこと
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri01_00127.html）

これまでの外国人材の受入れは、①短期滞在者（観光客等）②留学生等③日本人の配偶者等④就労資格外国人（専門的・技術的分野）そして、⑤技能実習法に基づく技能実習生であった。これに加えて前述の「特定技能外国人」が新しい対象となった。今では在留外国人総数（中長期在留者数及び特別永住者数の合計）が194ヶ国263万7251人（平成30年6月末法務省データ）となり、現在も増加している。新しい制度によって日本の様々な地域に住む外国人が必ず増えることが予想されている。

徳島の現状

徳島県内でも、徳島新聞が「共生への道-徳島の外国人材を考える-」第一部としてこの1月12日から22日の計9回の掲載にて、技能実習生が会う1労災2ハラスメント3賃金不払い4長時間労働5失踪6悪質ブローカー7出稼ぎの妻（単身で来日する母）について特集が組まれた。7つの項目でもわかるように、技能実習制度（日本の優れた技能を学ぶために実習生として来日する）が、来日外国人と受入れ企業の間にはブローカーが存在し、実習生が安い労働力として働かされているケースが多いことが報告されている。平成30年末の統計データで、日本国内には28万6千人あまり、徳島県内には2398人である。この特集が、県内及び国内の技能実習生に対して、制度そのもの、実習生の人権が実習生を受入れる事業主によって守られていない状況等、徳島で働く外国人に対する負のイメージがメディアによって与えられたように思う。しかしその後、1月末から3月にかけて「外国人材 in 徳島」と題して、ベトナムからの実習生を受入れた企業が組織内で日本語の授業を行い、また受入れの日本人側にベトナム語やベトナムの文化を学ぶ時間を作っていること、市の国際交流協会（TIA）の英語による相談窓口に寄せられる相談が増加し、対応への整備の必要があること、一方県の国際交流協会（TOPIA）が災害時のボランティア通訳を募集していることや様々な研修会を通して在住外国人を受入れるために活動を起こしている実状を記事にしている。そして最初に取り上げた日本語教室の記事のように、これまで在住外国人（実習生、永住外国人、介護士等）とは接点のなかった人たちへ、これからの時代は多くの出会いがあり共生が求められていることの啓発となっている。外国人受入れを巡って記事を読む一般の人たち認識の変化が期待される。県内の在住外国人（平成30年6月末）は約80ヶ国5640人であり、決して他人事ではなく自分の事として考えていく必要があるだろう。

美波町と徳島大学の連携

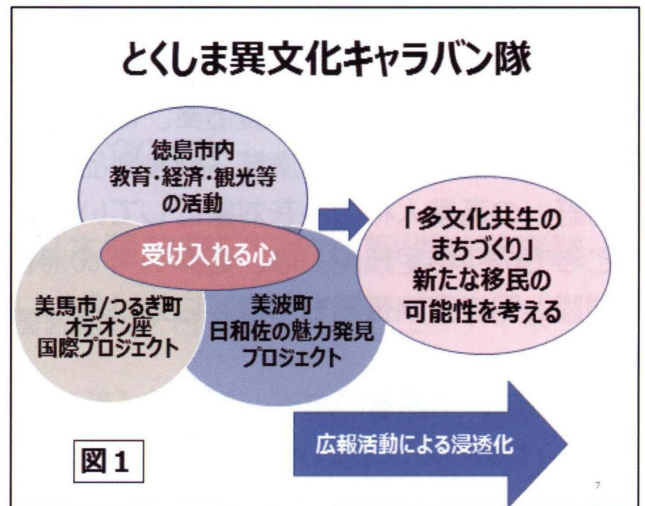
<とくしま異文化キャラバン隊>

大学と美波町の関わりは、とくしま異文化キャラバン隊「文部科学省留学生交流拠点整備事業（平成25-27年）」から始まる。これは、留学生の生活や就職を支援しつつ、地域の経済活性化や街づくり、教育支援や観光振興に留学生の視点を活かすことを目標とした実践的調査研究である。主体は留学生であり、大学（徳島県内の高等教機関：徳島大学、四国大学、徳島文理大学、鳴門教育大学、徳島工業短期大学、阿南高等専門学校等）を中心とした地域コンソーシアム（協力体制）を整備し、留学生が活躍できる地域作りのモデル構築が目指されていた。

留学生 30 万人計画と同時に、留学生の視点による地域の活性化と将来的な日本での就職と定住を期待していたものである。徳島大学はこの事業を、徳島市内と県南部の美波町（日和佐八幡神社の支援）そして西部の美馬市（町の文化財である脇町劇場オデオン座での演劇）に拠点を置いて、留学生と地域の人たちが互いに交流すること、互いに言語や文化知ることを目的とした活動を行ってきた。6 年経過した今も、文化庁事業の中で継続し、地域の人と留学生そして在住外国人を含めた交流活動を実施している。当初から「多文化共生のまちづくり」を事業の目的として掲げてきている（図 1 参照）。

現在も継続しているのが、「日和佐の魅力発見プロジェクト」である。もともとは、少子高齢化のため存続の危うくなった祭りへの参加要請を受け、男性がちょうさと呼ばれる太鼓屋台を担ぐ人手として関わった。一日目はちょうさと共に街を練り歩き、二日目は大浜海岸に繰り出すという勇壮かつ危険な祭りである。祭り参加によって「日和佐の魅力を発見できる」男性に対して、女性には一日目には街歩きによる魅力発見の活動を行っている。平成 30 年 10 月 6 日には、日和佐中学の生徒、ボランティア観光ガイド、日和佐在住の外国人（日本語教室の学習者）、「美波共生ネットワークハーモニー～Harmony～」(以降ハーモニーと記述)のメンバーが、とくしま異文化キャラバン隊の徳島大学及び阿南高専の留学生と徳島市立高校生を受入れ、総勢 40 名が 5 つのグループに分かれて街歩きを行った。最後に中学生、高校生、留学生(22 名)それぞれのお気に入りの 1 枚の写真を示しながら街の魅力について、昔の銭湯跡をオフィスとしている IT 関連の会社「あわえ」にて報告した。ハーモニーと大学が協力して行う、美波町を舞台として日本語を使ってお互いを知るため、さらに街の活性化につなげる活動と位置付けている。またこの祭りを守るために動く「ちょうさ保存会」が、外国人や高校生の参加を募って町民以外の新たなメンバーで祭りを継続させているという点が評価され、平成 29 年に「ふるさときらり大賞（一般財団法人地域活性化センター）」を受賞し、広く全国へ動画とともに広報された（以下 URL を参照のこと、<https://www.youtube.com/watch?v=1a1i8UldqzU>）。

その後資金的には県のとくしま農山漁村（ふるさと）応援し隊事業の支援も得られて、徳島からの 1 泊 2 日の活動が今後も継続可能となった。大学としては、留学生と高校生が美波町を訪れ、一緒に地域の課題解決に関わることを目標としている。現在では、ハーモニーが核となって、地域



の在住外国人と地域住民をまとめて外部からのキャラバン隊を受入れる役割を担っている(とくしま異文化キャラバン隊の2018年の活動一覧は最後に資料として記載)。

<文化庁日本語教育事業>

本冊の中で報告されている、美波町での日本語教室の開設、多文化共生イベントに加えて、大学として実施したのは「多文化共生のまちづくり」講座(平成30年度までは徳島大学開放実践センター主催)である。筆者が留学生の日本語教育に携わる中でこれまで考えてきたことは、学習者に日本語を教えることができても、学習者が日本語を使って日本社会に生きることができるわけではない事実である。日本語能力をいかに高められても、日本人が日本語学習者である外国人を受入れて日本語で話そうという気持ちがなければ成

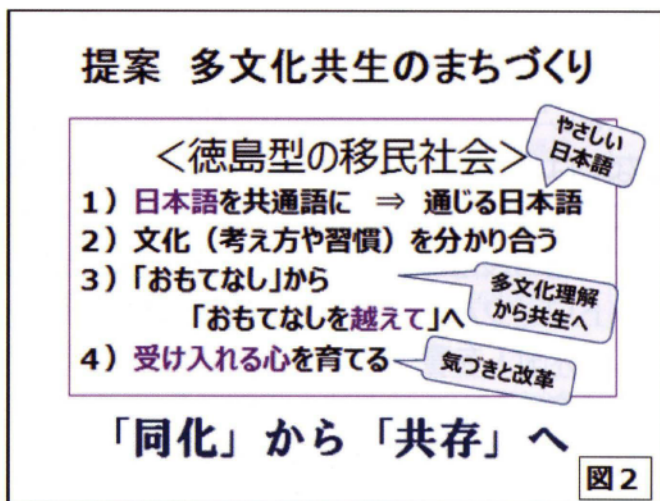
立しない。この場合のコミュニケーションとは両方の積極的な参加が前提なのである。前述のとくしま異文化キャラバン隊の発想もここにある。学内での日本語教育を充実させるとともに、地域の日本人に受入れる心を持ってもらう事が何よりも必要であることに気がつき、そのための活動を実施してきた。図2では「多文化共生のまちづくり」の実現に必要な項目を掲げている。

- 1) 日本で生活する外国人に対して自分たちはどんな日本語で対応しているのかを考えること、外国人=(イコール)英語から、相手のわかる日本語(やさしい日本語・共通語)を使ってみること
- 2) お互いの文化を分かり合うこと、これを実践することによってより広いものの見方や思いもよらなかった新しいアイデアが生まれることを歴史的に見ても私たちは体得しているはずである、この感覚を呼び戻すこと
- 3) 四国の持つ遍路文化の「おもてなし」「お接待」は一過性のものであるが、「おもてなしを越える」には長く生活する人に対してのいたわり、思いやりの心をもつこと
- 4) これらを含めて、私たちの中に受入れる心を育てることで、それが何よりも地域を良くするためという新しい意識改革が必要なこと

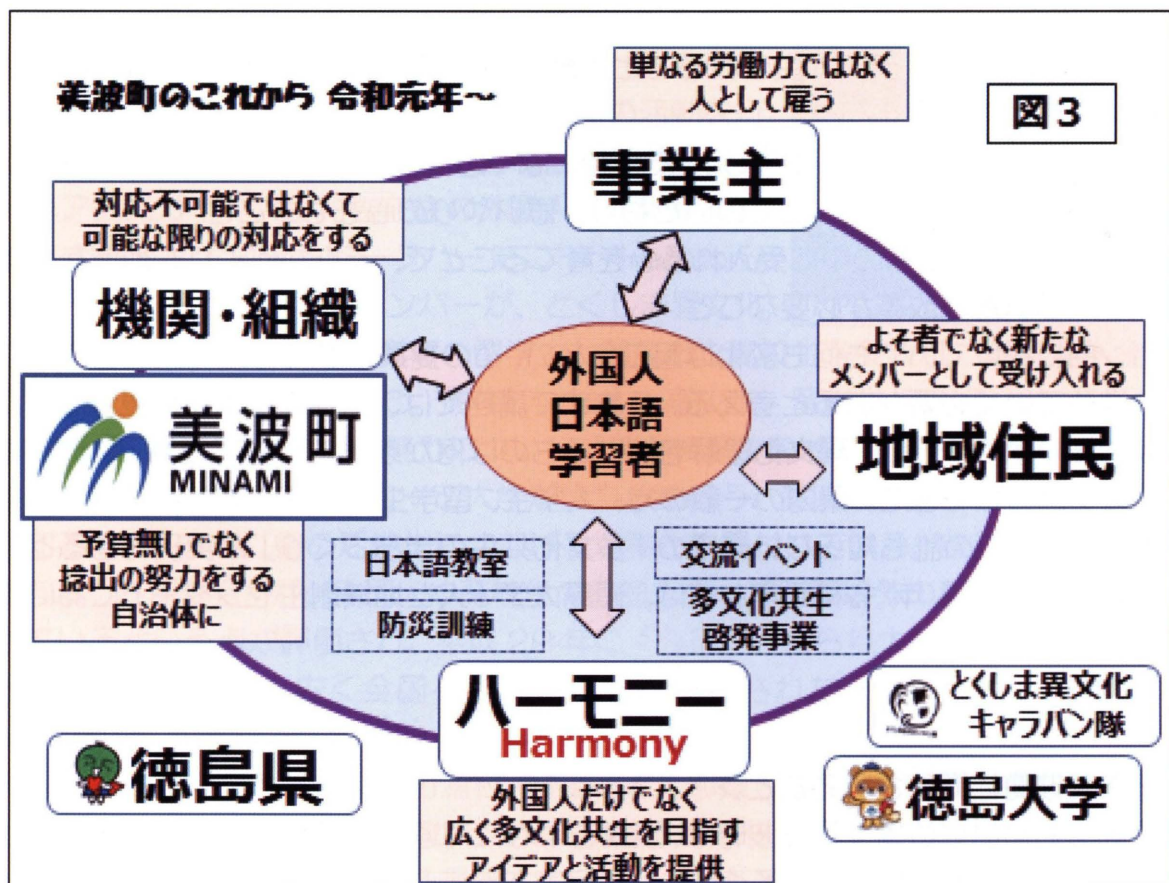
スローガンのように掲げていても何も変化は起こらない、この提案が多くの人々の共通目標となることを少しずつ進めていく必要があると考える。これまで講座では、自らの日本語の見直し、コミュニケーションの振り返り、そして異文化理解を妨げるものは何かをミニ講義で提供し、参加者同士で話して、考える場としてきた。県内の一般の方、大学生、留学生と一緒に対話し考える場を提供すること、本当に意味での誰も知らない未来の「多文化共生のまちづくり」が実現できると信じている。(この講座も平成31年/令和元年からは、徳島大学「人と地域創生センター」において続けて開講する。)

<これからの美波町に期待されること>

徳島県南部の海沿いに位置する美波町は、漁業を中心に海運が発達し昔から人の出入りがあった地域である。現在は外国人の遍路も多く訪れ、古民家を改装した宿泊施設も新しくできている。こ



の施設は、美波町日和佐地区の町並みに魅せられたフランス人が、古い家屋と街の美しさを将来に残す必要があることを、日本人の私たちに見える形で教えてくれたように思う。生まれ育った地域の当たり前の方が、異なる文化の人から見るとこれだけ魅力的なものになるのかという驚き、伝統だけでなく新しい視点からの使い方や飾り方が提案されて新たな意味を持つ宿は、多文化共生を実践していくことの意義として捉えられるだろう。またこの古民家はこの町そのものとも言えよう。この町の魅力を発見して広く知らせる、違う視点から新たに魅力を発見し、これまでこの地域を守ってきた人と協力して新たなまちを創っていく。協力はそれぞれの役割を理解しできることをする、そして次に地域のための活動と一緒に考えていく作業は協働の段階であろう。今、美波町に必要なのは、この町の魅力を大切に守り、互いの暮らしを支えていこうという目標が住民に共有され、そこでの対話から新たな集合知を生みだし、誰も想像しなかった新たなまちづくりへと向かうという、共創の段階に入ることだろう。そのためのスタートアップを起こしたのが、「美波多文化共生ネットワークハーモニー」である。地域住民の立場から、外国人を受入れるクッションの役割を果たし、外国人を雇う事業主への配慮、地域の様々な機関や組織とのつながりを持って、自治体としての美波町が主導権を持って新たなまちづくりへと向かうことを、支援していく役割を担い続けていくことが望まれている(図3)。日和佐八幡神社の祭りを通して、大学と美波町との関連ができて7年が経った。関わる中で町の人たちとつながりができ、関係性も変化があった。令和元年が新たな移民を考え、受入れる始まりとなったことも感慨深い。今後も図の協力関係を維持し、増加する外国人住民に様々な日本語学習の機会を提供していくことを共に考え、これからの美波町のまちづくりを支援していきたいと考える。



資料 とくしま異文化キャラバン隊+文化庁日本語教育+多文化共生 事業 2018 実績				
	日付	地域	活動及び内容	場所
1	4月2回	徳島	多言語ラボ 市立高校 中国語と台湾事情 講座	徳島市 徳島市立高校
2	6月7日	徳島	ものづくり体験交流会 徳島県中央テクノスクール	徳島県中央テクノスクール
3	6月16日	徳島	世界の扉を拓こう! 第一回 モンゴル展	多言語コモンラウンジ
4	6月27日	徳島	伝統をメイクする 創作人形浄瑠璃から学ぶ表現の--上演会	総合科学部2号館
5	7月1日	徳島	徳島県立美術館×開放実践センター 講座	徳島市 文化の森
6	7月10日	徳島	市立高校 特別講義「多文化共生と私たち」	徳島市 徳島市立高校
7	7月13・15日	徳島	多言語ラボ 市立高校 ドイツ語とドイツ事情 講座	徳島市 徳島市立高校
8	7月16日	那賀町	那賀町モニターツアー 2018	那賀町
9	8月8日	美波	児童との交流 黒地児童館 阿南市	阿南市 黒地児童館
10	12日	徳島	多言語ラボ 市立高校生 台湾の大学生と町歩き	徳島市内
11	9月7-8日	徳島	「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 会議	地域創生国際交流会館
12	9月10日	徳島	徳島GGクラブ例会 徳島県外国人弁論大会優勝者と	多言語コモンラウンジ
13	9月22日	徳島	世界の扉を拓こう! 第二回 モンゴル展	多言語コモンラウンジ
14	9月27日	徳島	ドイツ人高校生 モニターツアー 生活衛生営業指導センター	市内 そば蔵
15	10月6-7日	美波	日和佐八幡神社秋祭り	美波町 日和佐
16	10月21日	徳島	外国人遍路体験 ジュニア観光ガイド 1番から3番札所	鳴門市・徳島市
17	11月1日	徳島	留学生 モニターツアー 生活衛生営業指導センター	徳島市内 そば店
18	11月10日	徳島	外国人遍路体験 平等寺 NPO法人一歩会	阿南市
19	11月17日	徳島	徳島GGクラブ 通訳人材養成セミナー 実地研修	徳島市
20	11月24日	美波	美波町人権フェスティバル	美波町 日和佐
21	12月17日	徳島	多言語ラボ 市立高校と開南大学(台湾)交流会	図書館多目的室
22	12月24-25日	つるぎ	オデオン座国際プロジェクト 脇高/つるぎ町 ホームステイ	美馬市 つるぎ町
23	12月15日	徳島	世界の扉を拓こう! 第三回 日和佐の祭展	多言語コモンラウンジ
24	1月12日	徳島	教養教育院 セミナー「CEFRっていったい何?」講演&WS	フューチャーセンター
25	1月17日	徳島	「サツマイモのニーズおよび嗜好性調査」	フューチャーセンター
26	1月18日	徳島	市立高校 交流会 IRP Ichiko Rainbow Plan	徳島市立高校
27	1月23日	徳島	多言語ラボ 市立高校 中国語交流会	多言語コモンラウンジ
28	1月26日	美波	徳島GGクラブ 通訳人材養成セミナー 実地研修	美波町日和佐
29	1月27日	美波	防災ワークショップ 美波町	美波町 日和佐
30	2月16日	つるぎ	徳島GGクラブ 通訳人材養成セミナー 実地研修	つるぎ町 美馬市
31	3月8日	徳島	徳島GGクラブ例会 カンボジアと徳島の連携に関して	多言語コモンラウンジ
			多文化共生のまちづくり講座 春学期10回 秋学期10回 開放実践センター	地域創生国際交流会館
			徳島GGクラブ 通訳人材養成講座 7回 徳島県及び教養教育院	多言語コモンラウンジ

とくしま異文化キャラバン隊は、留学生交流拠点事業終了後も
 継続して、留学生を中心とした交流及び地域の課題解決といった
 活動を行っている。

